市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第44集

市原市福増中ノ台遺跡

２０１８

株式会社　城　装
市原市教育委員会

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第44集

市原市福増中ノ台遺跡

ふくますなかのだい

２０１８

株式会社　城　装
市原市教育委員会

例　　言

1　本報告書は、千葉県市原市福増123-2、123-3、123-4地先に所在する福増中ノ台遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、展開検査場の造成にともない、株式会社城装の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもと、市原市埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　発掘調査は、事業範囲2,406㎡のうち、722.4㎡を対象として実施した本調査である。これは、平成28年度に市原市の国庫補助事業として埋蔵文化財調査センターが実施した75㎡の確認調査の結果を受けたものである。

4　発掘調査、整理作業は、以下のとおりに行った。

　発掘調査　平成30年2月1日～平成30年3月1日　担当　小川浩一・中野喬介

　整理作業　平成30年4月13日～平成30年9月25日　担当　小川浩一・中野喬介

5　本書の執筆は、第1・2章を小川浩一、第3章を中野喬介が行った。

6　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

7　本遺跡の市原市埋蔵文化財調査センターの調査コードはセ561である。

8　本書に収録した出土遺物および記録類は、市原市教育委員会ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターで収蔵、保管している。

本 文 目 次

例　言

第1章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第2章　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・1

第3章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・巻末

挿 図 目 次

第1図　福増中ノ台遺跡及び周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第2図　福増中ノ台遺跡周辺地形図・・・・・2

第3図　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第4図　遺構平面図（1）・・・・・・・・・・・・・・5

第5図　遺構平面図（2）・・・・・・・・・・・・・・6

第6図　断面図（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第7図　断面図（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第8図　出土遺物（1）・・・・・・・・・・・・・・・9

第9図　出土遺物（2）・・・・・・・・・・・・・・10

第10図　出土遺物（3）・・・・・・・・・・・・・・11

第11図　出土遺物（4）・・・・・・・・・・・・・・12

表 目 次

第1表　出土土器観察表・・・・・・・・・・・・17

第2表　出土石器観察表・・・・・・・・・・・・20

第3表　出土土製品観察表・・・・・・・・・・20

写 真 図 版 目 次

図版1・2　遺構写真

図版3～6　出土遺物写真

第１章　はじめに

１　遺跡の概要

（１）位置と環境

福増中ノ台遺跡は、養老川中流域右岸の沖積地を西に望む市原台地西端部に位置し、北側から村田川支流神崎川の支谷等により浸食された台地上に立地する。標高は72ｍ前後を測る。また、西側に立地する標高30ｍ程度の養老川右岸河岸段丘面から延びる支谷が、遺跡のある台地を開析しており、調査地点はその谷頭部にあたる。

（２）調査の概要

福増中ノ台遺跡は、平成28年度に国庫補助事業として確認調査が行われたのち、その結果を受けて平成29年度に、一部本調査が行われた。調査の成果をみると、縄文時代竪穴建物跡２棟、縄文時代早期炉穴跡５基、土坑２基、弥生時代後期（終末期を含む）竪穴建物跡６棟、古墳時代前期竪穴建物跡３棟を検出している。このうち、調査区南東部からは縄文時代後期の注口土器が出土しており、東に近接する武士遺跡と同様に、当該期に濃密な遺構の存在があったことを想像させる。

（３）周辺の遺跡

本遺跡に東接する武士遺跡（調査団調査区）からは、縄文時代後期堀之内式期における多量の土器片や弥生時代の竪穴建物跡等が検出された。また、南東300ｍに県浄水場建設に伴う武士遺跡（県調査区）が存在しており、縄文時代中期後葉～後期中葉及び晩期末葉の濃密な遺構、遺物が出土している。南方250ｍには武士廃寺が存在していたと考えられており、本遺跡から出土した平瓦は、武士廃寺から持ち込まれた遺物である可能性が高い。一方、西側に展開する養老川中流域の沖積微高地には、南西1.4kmに叶台遺跡、西方1.3kmに海士遺跡群（三入道地区）、同2kmに新殿古墳群等が存在しており、弥生時代中期から古墳時代終末期にかけての遺構が検出されている。

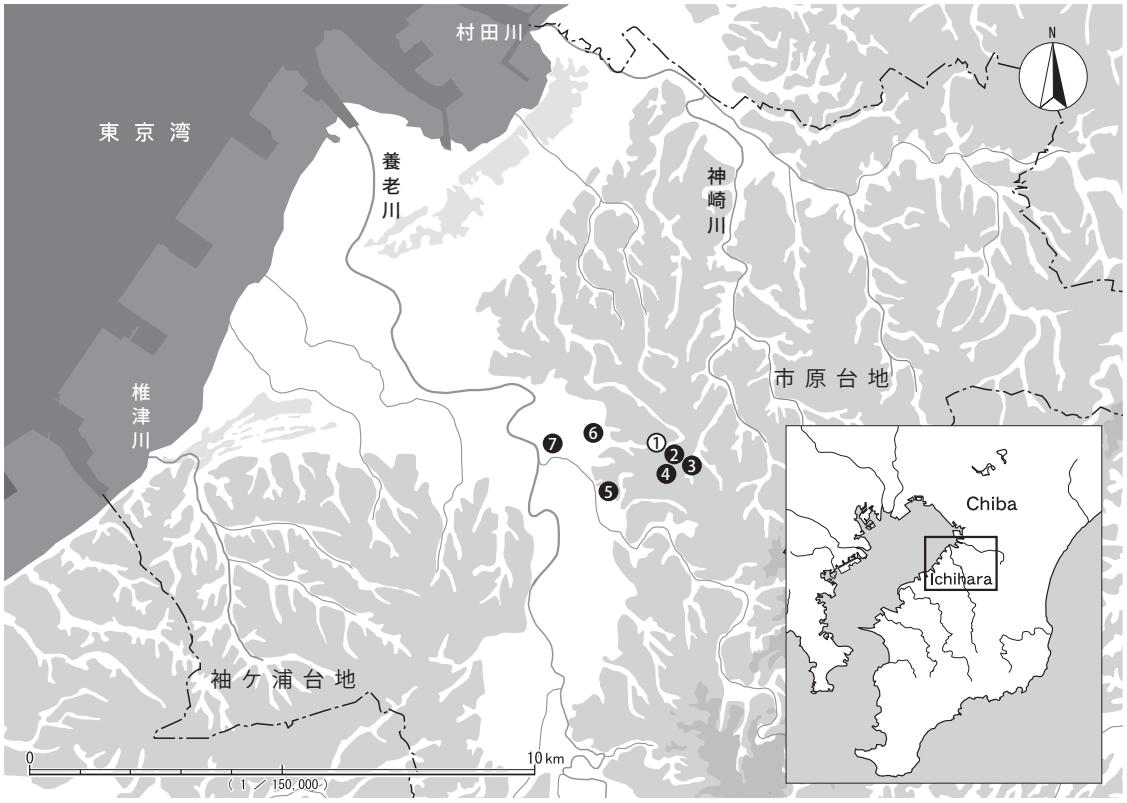
２　調査の経緯

今回の調査範囲は、事業範囲2,406㎡のうち、平成28年度に国庫補助事業として実施された75㎡の確認調査の結果を受けて決定された。確認調査の結果、遺構を確認した範囲のうち、施工上、遺構の保護ができないと判断された722.4㎡が対象となった。

第２章　検出された遺構と遺物

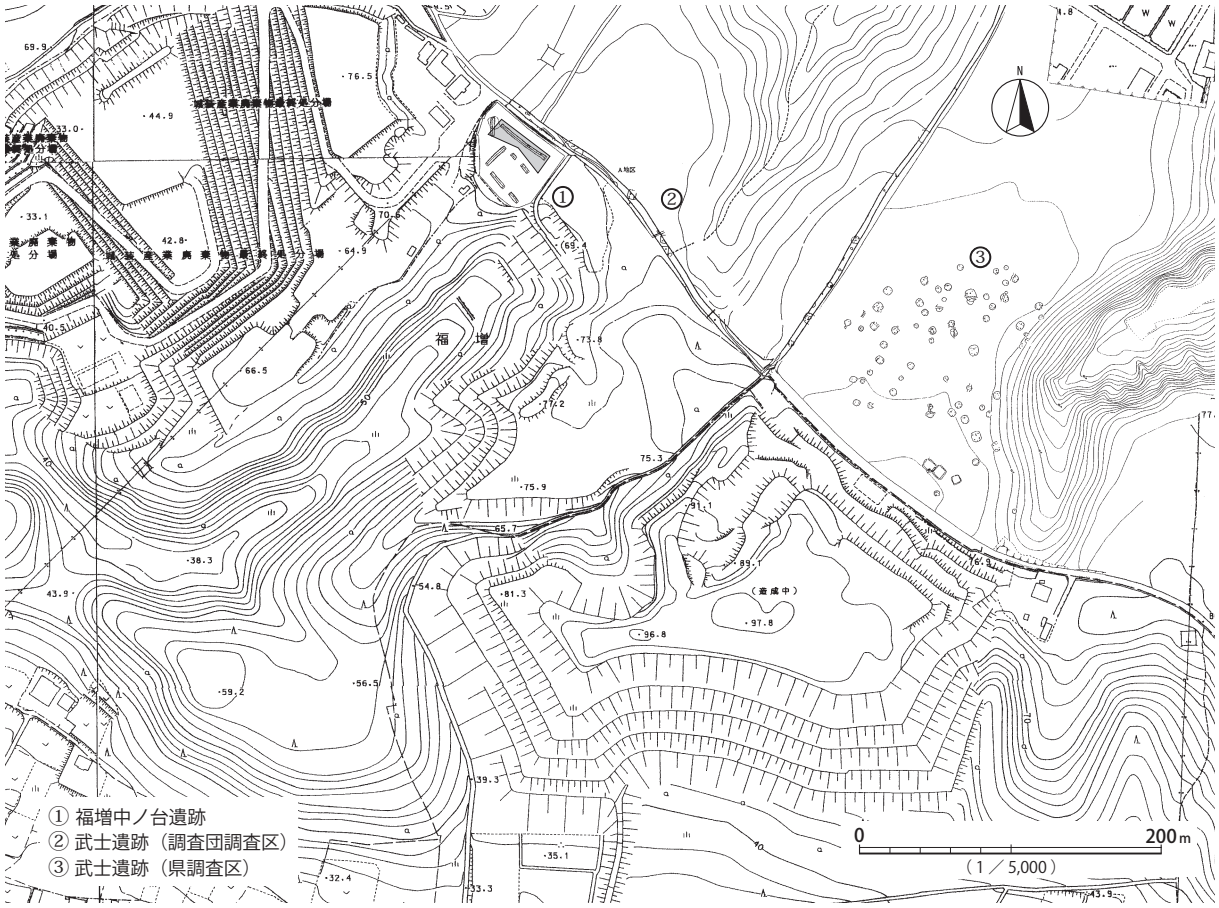
１　竪穴建物跡

概要　検出された竪穴建物跡は 11 棟あり、内訳は、縄文時代中期 1 棟、後期 1 棟、弥生時代後期（終末期を含む）6 棟、古墳時代前期 3 棟である。そのうち、南東隅部にある 2 号跡からは、縄文時代後期堀之内式の注口土器が出土した。



① 福増中ノ台遺跡
❷ 武士遺跡（調査団調査区）
❸ 武士遺跡（県調査区）
❹ 武士廃寺
❺ 叶台遺跡
❻ 海士遺跡群（三入道地区）
❼ 新殿古墳群

第1図　福増中ノ台遺跡及び周辺遺跡位置図



第2図　福増中ノ台遺跡周辺地形図

1 号跡（第 5・6 図・図版 1）

形態　遺構の大半が調査区外にあり、径6m前後の不整な円形を呈していたと考えられる。

構造　壁柱穴及び壁溝の痕跡が僅かに残るのみであり、覆土はほとんど残存していなかった。

遺物・時期（第８図・図版３）　縄文土器深鉢胴部片１のほか、弥生土器片・礫が少量出土した。

2 号跡（第 5・6 図・図版 1）

形態・構造　遺構の周囲が著しく撹乱されており、床面の一部が残存するのみである。覆土もほぼ残存していなかった。

遺物・時期（第８図・図版３）　完形の注口土器１が出土した。上半部に単節縄文を施文した後、楕円状の沈線を施す。他に弥生土器片・礫が少量伴う。遺構は、縄文時代後期前葉に帰属すると考えられる。

3 号跡（第 4・6 図・図版 1）

形態　南東側を撹乱により切られ、北東側の半分程度が調査区外にあると考えられる。径５m程度の隅の丸い不整な方形を呈していたと考えられる。

構造　深さ0.2～0.3 m程を測り、覆土はローム粒を均等に含む暗黒色土を主体とする。遺構内北西寄りに炉が存在する。

遺物・時期（第８図・図版３）　炉の南東脇から、沈線により羽状縄文帯が区画された壺頸部１が出土している。他に、変形工字文等が施された縄文時代晩期土器片11、12が出土しているが、混入であろう。遺構の形態及び出土遺物から、帰属時期は弥生時代後期前半と考えられる。

4 号跡（第 4・6 図・図版 1）

形態　遺構の北西側半分程度が調査区外にあり、径8m前後のやや隅の張った不整な円形を呈していたと考えられる。

構造　南東側の主柱穴及び出入り口に伴うピット等が検出された。炉は検出されず、調査区外に存在していると考えられる。深さは0.8～1.0m程度を測り、覆土は暗黒褐色土を主体とする。

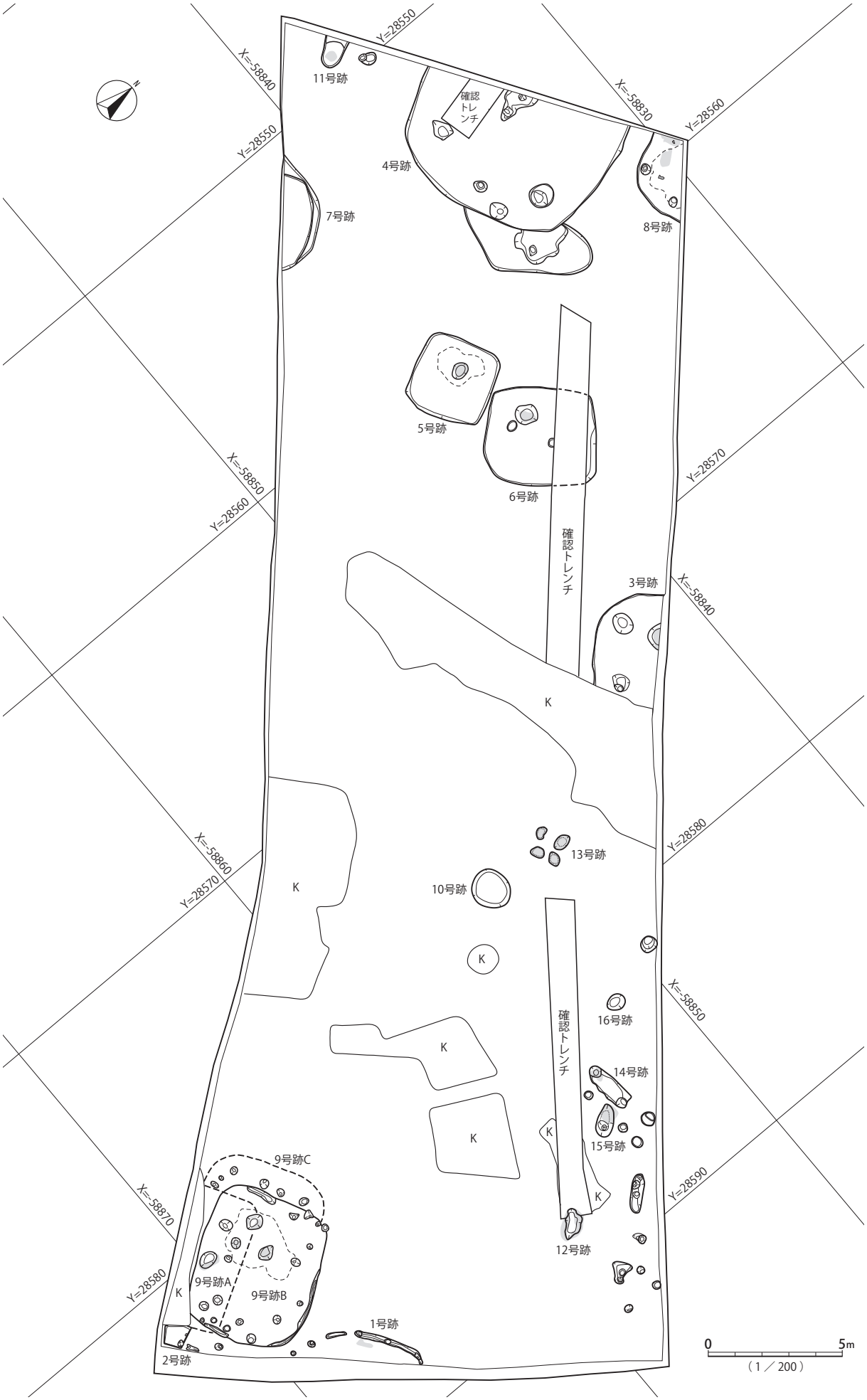
遺物・時期（第８・９図・図版３～５）　遺物は、結節文により羽状縄文帯や斜縄文帯が区画された弥生土器浅鉢１や壺２、１段の輪積み痕を残し、ヘラ状工具による刻み目を施した甕胴部15～20等が出土している。他に縄文土器片と縄文時代以前と見られる剥片が少量伴う。遺構の形態及び出土土器から、本遺構の帰属時期は弥生時代後期後半と考えられる。

5 号跡（第 4・6 図・図版 2）

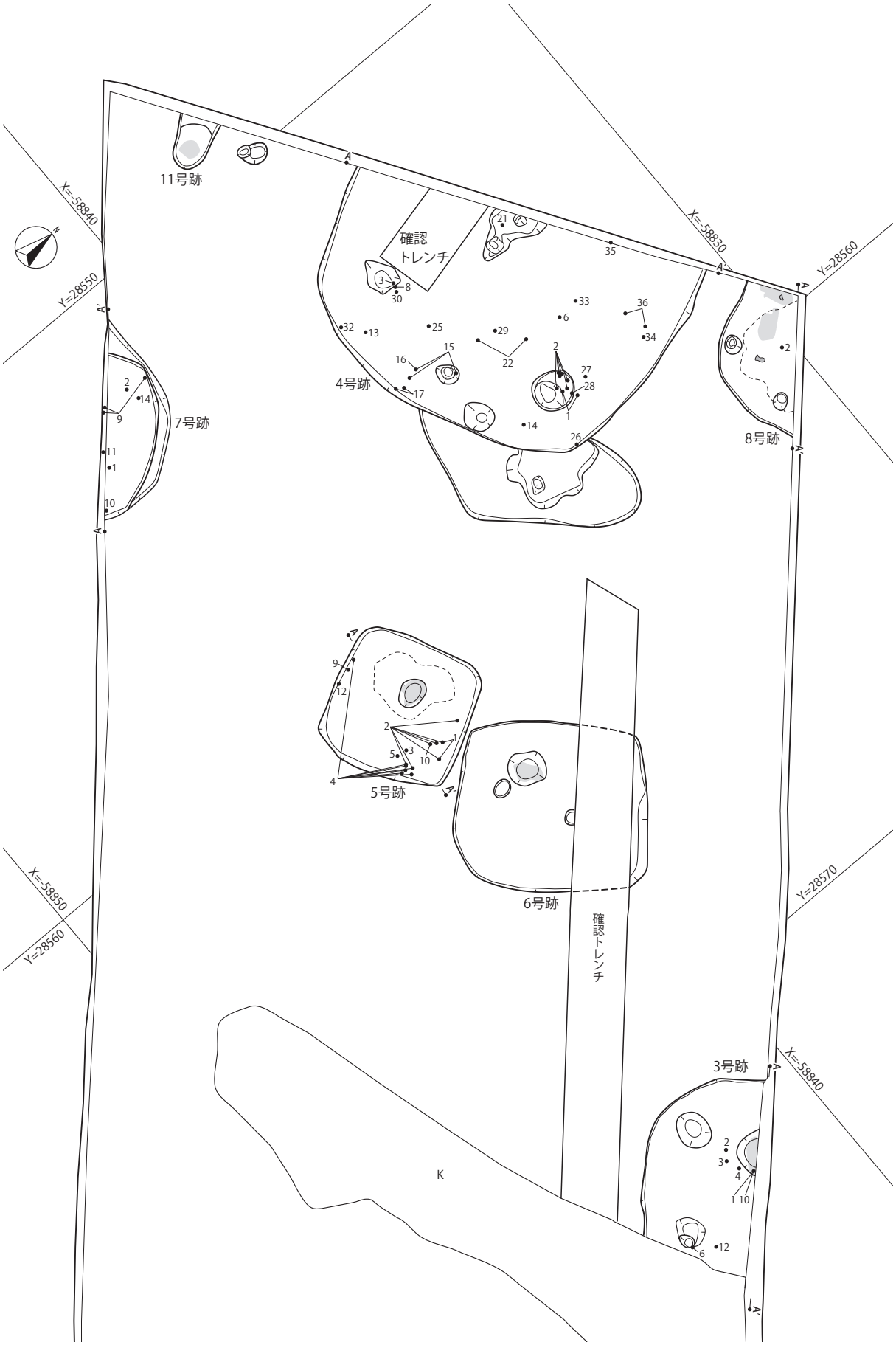
形態　北西―南東軸長3.1m、北東―南西軸長3.0mを測る、隅の丸まった方形を呈する。北東側に６号跡が隣接する。

構造　規模の小さい竪穴建物跡であり、柱穴は検出されなかった。遺構内中央北西寄りに炉が検出され、周囲の床面が硬化していた。深さは0.3m程度を測り、覆土はロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。

遺物・時期（第10図・図版３・５）　遺物は、ヘラミガキが施された弥生土器壺口縁部１や、壺底部２、結


Y=28550
X=58840
11号跡
確認トレンチ
X=58830
Y=28560
Y=28550
4号跡
7号跡
8号跡
5号跡
6号跡
X=58850
Y=28560
Y=28570
確認トレンチ
3号跡
X=58840
K
Y=28580
X=58860
Y=28570
13号跡
10号跡
K
K
X=58850
16号跡
確認トレンチ
K
14号跡
K
K
15号跡
9号跡C
X=58870
Y=28590
K
12号跡
Y=28580
K
9号跡A
9号跡B
1号跡
2号跡
0
5m
（1／200）

第3図　全体図

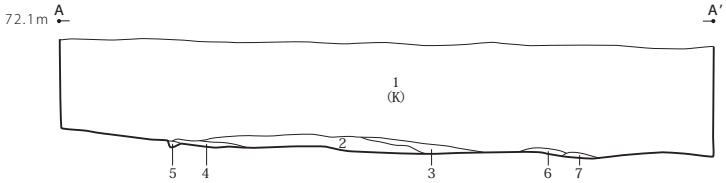

11号跡
確認
トレンチ
4号跡
7号跡
8号跡
5号跡
6号跡
確認トレンチ
3号跡
K
X=-58840
X=-58830
X=-58850
Y=28550
Y=28560
Y=28570
A
A'
N
0
4m
（1／120）

第4図　遺構平面図(1)

第5図　遺構平面図(2)

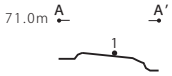
0　4m
(1／120)

1 号跡

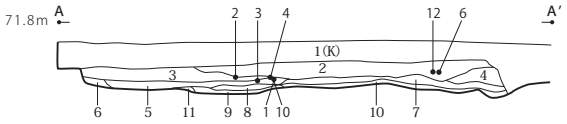


1　撹乱　客土
2　暗黒褐色土(褐色味強い)＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量だが均等)＋焼土粒(1 ～ 5 ㎜大・少量)
3　暗黒褐色土(黒色味強い)＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・微量)＋焼土粒(5 ㎜大・微量)＋炭化粒(5 ㎜大・微量)
4　暗黒褐色土(黒色味強い)＋焼土粒(1 ～ 5 ㎜大・微量)
5　暗黒褐色土＋ロームブロック(10 ～ 30 ㎜大・多量)
6　暗黒褐色土＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・均等)　よくしまる
7　暗黒色土＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量だが均等)＋焼土粒(1 ～ 3 ㎜大・微量)

2 号跡

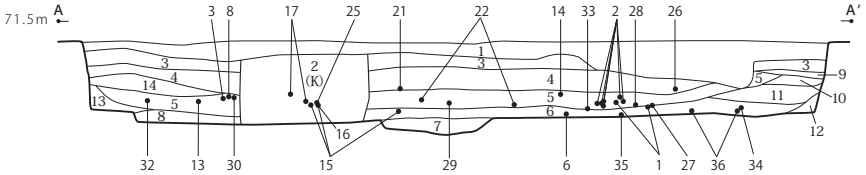


3 号跡



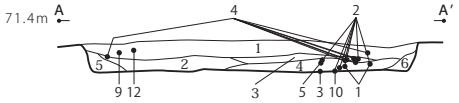
1　撹乱　客土
2　暗黒褐色土＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・微量)＋焼土粒(1 ～ 3 ㎜大・少量)
3　暗褐色土(やや黒色味がかる)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量だが均等)
4　暗褐色土＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量だが均等)
5　暗黒褐色土＋ロームブロック(5 ～ 30 ㎜大・均等)
6　暗黒褐色土(5 より黒色味強い)＋
　ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量だが均等)　しまりややゆるい
7　暗黒褐色土＋ロームブロック(5 ～ 20 ㎜大・少量だが均等)
8　暗黒褐色土(褐色味強い)＋焼土粒(5 ㎜大・少量)
9　暗褐色土＋焼土ブロック(5 ～ 20 ㎜大・少量だが均等)
10　暗褐色土＋暗黒褐色土(少量)　よくしまる
11　地山

4 号跡



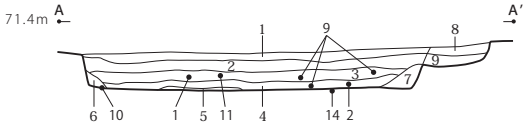
1　現表土
2　撹乱　確認トレンチ埋戻し土
3　暗黒色土　よくしまる
4　暗黒褐色土(黒色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量)
5　暗黒色土(3 より黒色味強い)＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量だが均等)＋焼土粒(5 ㎜大・微量)
6　暗黒褐色土(4 より褐色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量だが均等)
7　暗黒褐色土(6 より褐色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量)＋焼土ブロック(5 ～ 10 ㎜大・微量)
8　地山
9　暗黒褐色土(やや灰色味がかる)＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量だが均等)　よくしまる
10　暗褐色土(やや黒色味がかる)＋ロームブロック(5 ～ 20 ㎜大・均等)
11　暗褐色土(10 より褐色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・均等)＋焼土粒(5 ㎜大・微量)
12　暗褐色土(11 より褐色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 30 ㎜大・少量)
13　暗黒褐色土＋ロームブロック(5 ～ 20 ㎜大・少量)　しまりややゆるい
14　暗黒褐色土(4 より褐色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 30 ㎜大・少量だが均等)

5 号跡

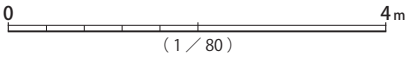


1　暗褐色土＋ロームブロック(5 ～ 80 ㎜大・少量だが均等)＋炭化粒(5 ㎜大・微量)
2　暗褐色土(黒色味がかる)＋ロームブロック(5 ～ 30 ㎜大・少量だが均等)
3　暗褐色土(2 よりやや褐色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 40 ㎜大・均等)
4　暗黒褐色土＋ロームブロック(5 ～ 20 ㎜大・少量だが均等)
5　暗黒褐色土＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量)
6　暗黒褐色土(5 より褐色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 20 ㎜大・少量だが均等)

7 号跡

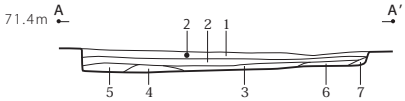


1　暗黒褐色土(やや灰色味がかる)＋ロームブロック(5 ～ 50 ㎜大・少量)
2　暗黒褐色土＋ロームブロック(5 ～ 40 ㎜大・少量)＋炭化粒(5 ㎜大・微量)
3　暗黒褐色土(2 よりやや黒色味が強い)＋
　ロームブロック(5 ～ 50 ㎜大・少量だが均等)＋焼土粒(5 ㎜大・微量)
4　暗黒褐色土(3 より黒色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量)＋
　炭化粒(5 ㎜大・少量)＋焼土粒(1 ～ 5 ㎜大・微量)
5　地山
6　暗黒褐色土＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量だが均等)　しまりゆるい
7　暗黒褐色土(6 より黒色味強い)＋ロームブロック(10 ～ 30 ㎜大・少量)　しまりややゆるい
8　暗黒褐色土(1 より黒色味強く、灰色味なし)
9　暗褐色土(やや黒色味がかる)＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量だが均等)



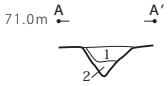
第6図　断面図(1)

8 号跡



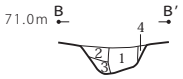
1　暗黒褐色土(やや褐色味がかる)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量だが均等)＋炭化ブロック(15 ㎜大・微量)
2　暗黒褐色土＋ロームブロック(5 ～ 30 ㎜大・少量だが均等)＋炭化ブロック(5 ～ 10 ㎜大・微量)
3　暗黒褐色土(黒色味強い)＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・微量)＋
　炭化ブロック(5 ～ 8 ㎜大・少量)＋焼土粒(1 ～ 3 ㎜大・微量)
4　暗褐色土(やや黒色味がかる)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量)
5　暗黒色土(やや褐色味がかる)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量)＋炭化粒(1 ～ 5 ㎜大・少量)
6　暗黒褐色土＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量)
7　暗褐色土＋ロームブロック(5 ～ 8 ㎜大・少量)　しまりややゆるい

9 号跡 A



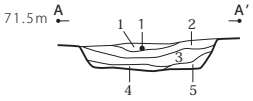
1　暗黒色土＋暗褐色土(少量)＋ロームブロック(5 ～ 30 ㎜大・少量だが均等)＋焼土粒(5 ㎜大・少量)
2　暗黒褐色土(褐色味強い)＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量)＋焼土粒(5 ㎜大・微量)

9 号跡 C



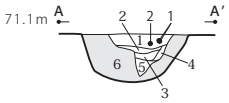
1　暗黒色土＋ローム粒(1 ～ 8 ㎜大・少量だが均等)　黒色味強い
2　暗黒色土＋暗褐色土(少量だが均等)＋ローム粒(5 ㎜大・少量だが均等)
3　暗褐色土＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量だが均等)＋焼土粒(1 ～ 5 ㎜大・少量)
4　暗黒褐色土＋ロームブロック(5 ～ 20 ㎜大・少量だが均等)

10 号跡



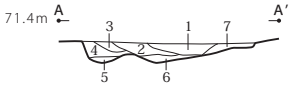
1　暗黒褐色土＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量)＋焼土粒(5 ㎜大・微量)
2　暗黒褐色土(1 より褐色味強い)＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量だが均等)
3　暗褐色土＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量だが均等)＋炭化粒(5 ㎜大・微量)
4　暗黒褐色土(1 より褐色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 30 ㎜大・少量)
5　暗褐色土＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・均等)　しまりややゆるい

12 号跡



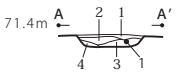
1　暗褐色土(やや黒色味がかる)＋ロームブロック(5 ～ 15 ㎜大・微量)＋焼土ブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量)
2　暗褐色土(1 より褐色味強い)＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量)＋焼土粒(1 ～ 3 ㎜大・微量)
3　暗褐色土(黒色味やや強い)＋ロームブロック(5 ～ 30 ㎜大・微量)＋焼土粒(1 ～ 5 ㎜大・少量だが均等)
4　暗褐色土＋焼土粒(1 ～ 5 ㎜大・多量)
5　暗黒褐色土(黒色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量)＋焼土粒(1 ～ 5 ㎜大・微量)
6　焼土

14 号跡

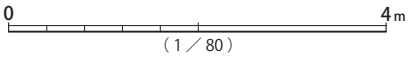


1　暗黒褐色土＋ローム粒(1 ～ 4 ㎜大・少量)＋焼土粒(1 ～ 3 ㎜大・微量)
2　暗褐色土＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・微量)＋焼土粒(1 ～ 3 ㎜大・微量)
3　暗黒褐色土(1 より褐色味強い)＋ローム粒(1 ～ 4 ㎜大・少量だが均等)＋焼土粒(1 ～ 4 ㎜大・少量)
4　暗黒褐色土(3 より褐色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・均等)＋焼土ブロック(5 ～ 10 ㎜大・少量)
5　暗黒褐色土(4 よりやや褐色味強い)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・均等)＋焼土粒(1 ～ 5 ㎜大・少量だが均等)
6　暗褐色土(やや黒色味がかる)＋ロームブロック(5 ～ 20 ㎜大・少量)＋焼土粒(5 ㎜大・微量)
7　暗黒褐色土(褐色味がかる)＋ロームブロック(5 ～ 10 ㎜大・均等)＋焼土粒(3 ㎜大・微量)

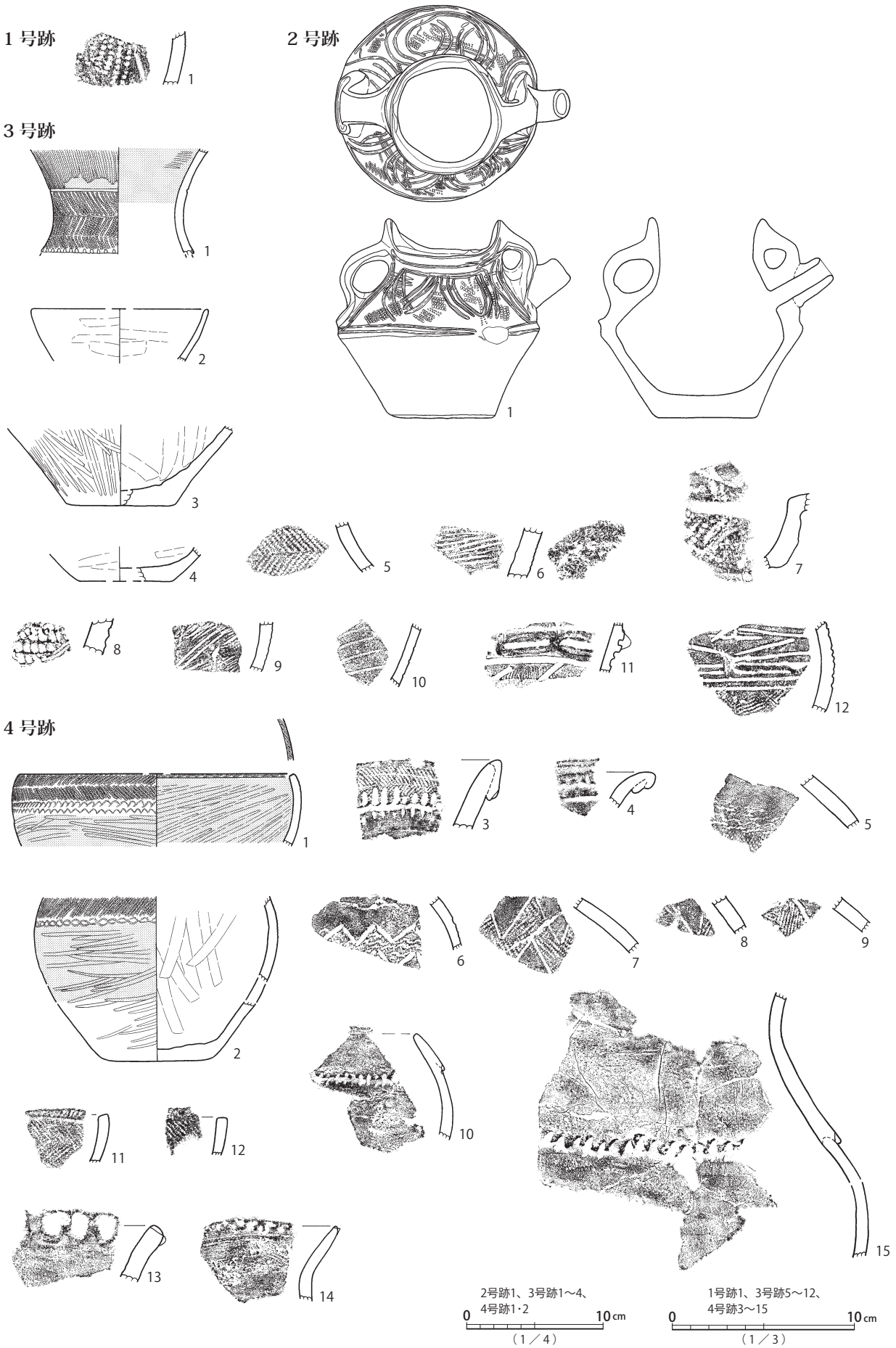
16 号跡



1　暗褐色土＋ローム粒(1 ～ 3 ㎜大・少量)＋焼土粒(5 ㎜大・微量)
2　暗黒褐色土＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量だが均等)
3　暗褐色土＋ローム粒(1 ～ 4 ㎜大・少量だが均等)
4　暗褐色土＋暗黒褐色土(少量)＋ローム粒(1 ～ 5 ㎜大・少量)＋焼土粒(1 ～ 3 ㎜大・微量)

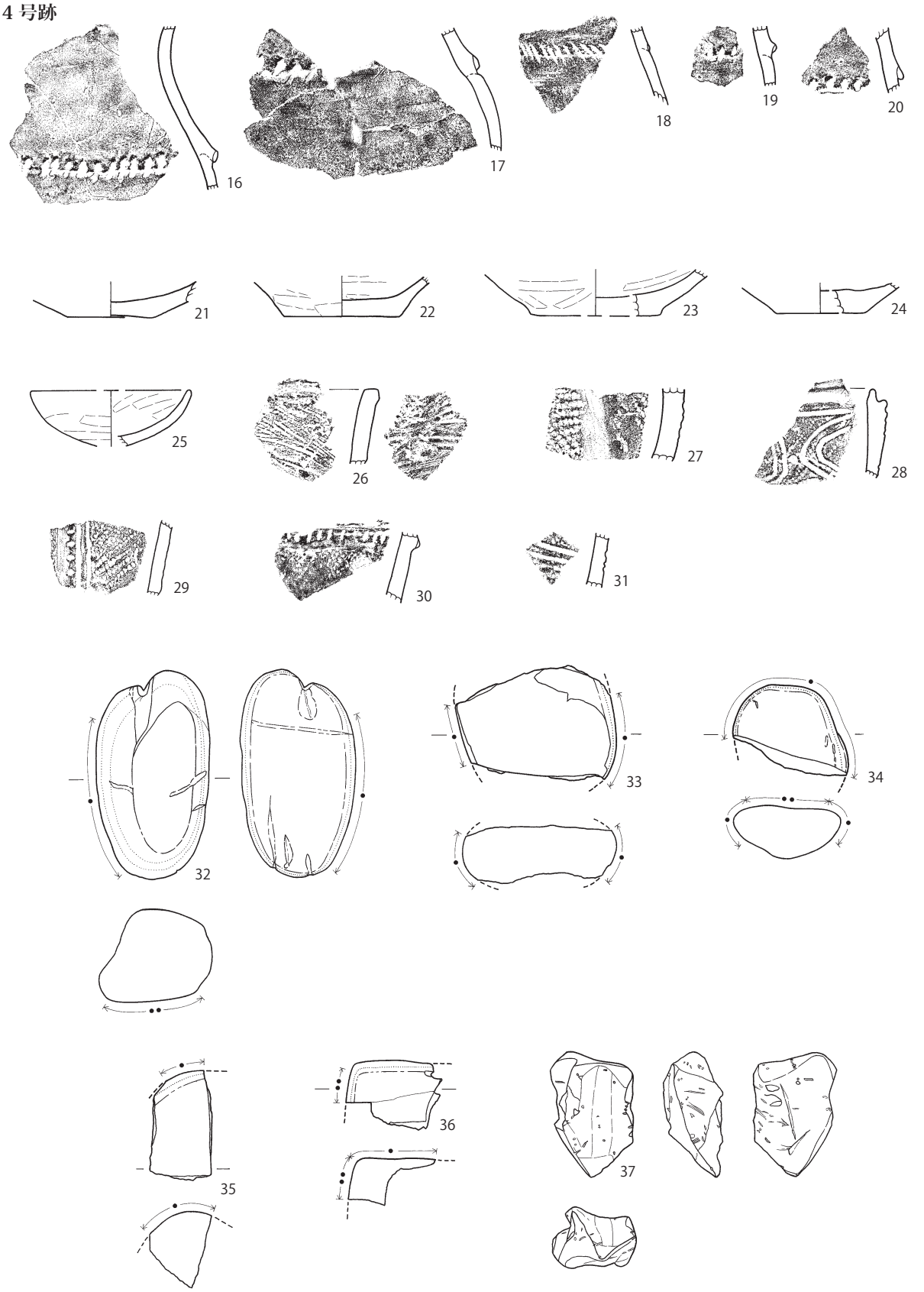


第7図　断面図(2)

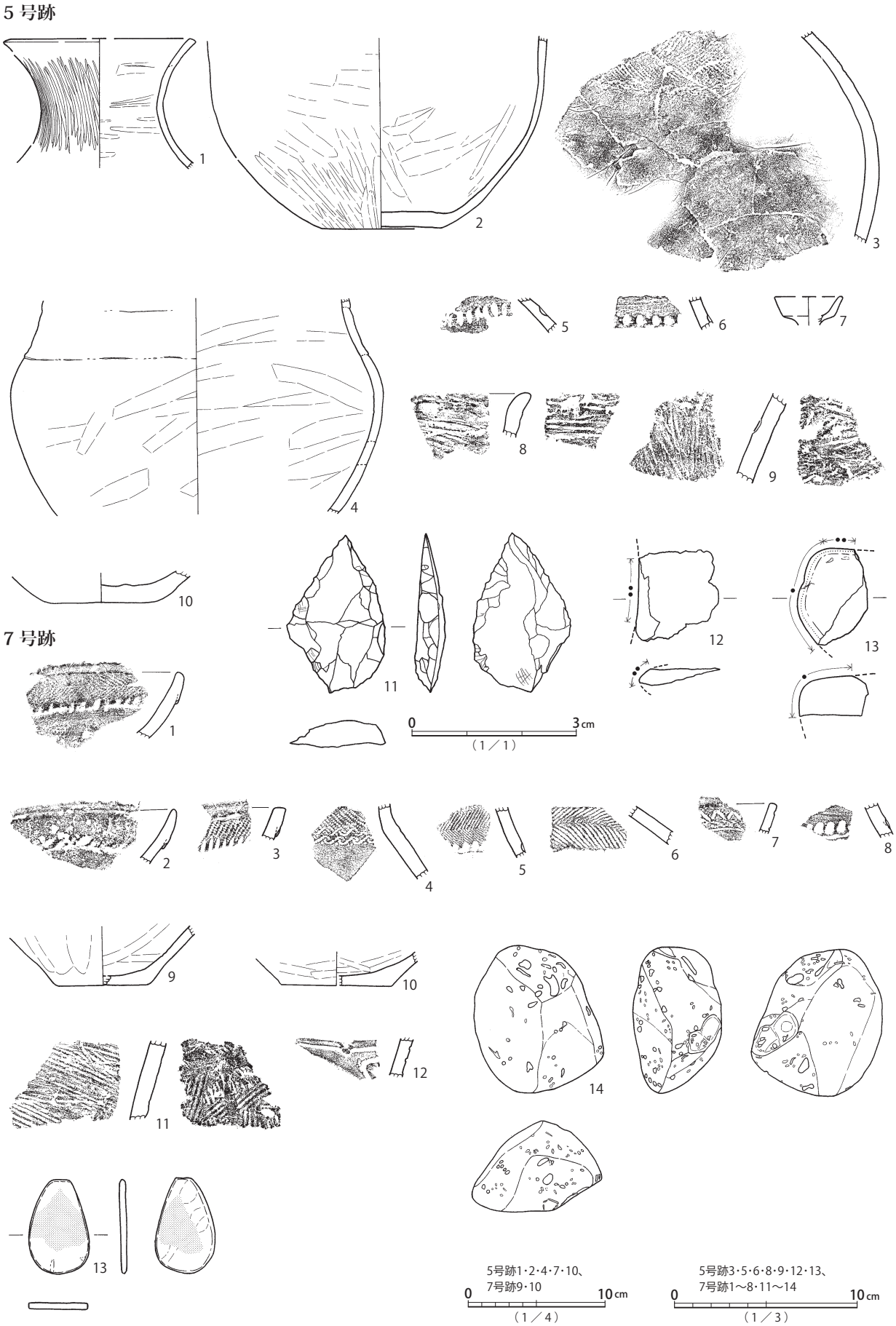

1 号跡
2 号跡
3 号跡
4 号跡
2号跡1、3号跡1～4、
4号跡1・2
0
10cm
（1／4）
1号跡1、3号跡5～12、
4号跡3～15
0
10cm
（1／3）

第8図　出土遺物(1)

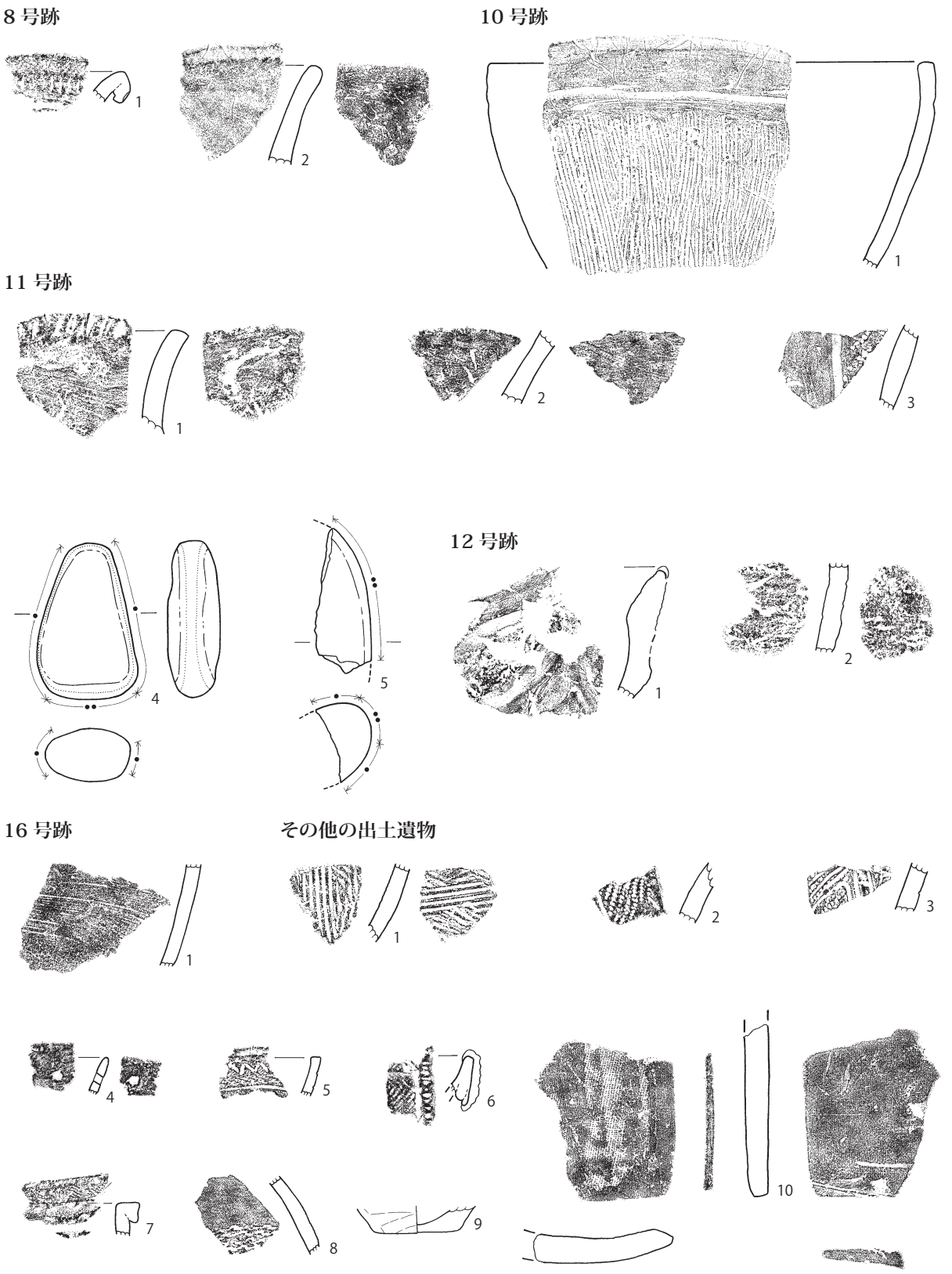
4 号跡



第9図　出土遺物(2)


5号跡
7号跡
0
3cm
（1／1）
5号跡1・2・4・7・10、
7号跡9・10
0
10cm
（1／4）
5号跡3・5・6・8・9・12・13、
7号跡1～8・11～14
0
10cm
（1／3）

第10図　出土遺物(3)


8 号跡
10 号跡
11 号跡
12 号跡
16 号跡
その他の出土遺物
10号跡1、
その他の出土遺物9・10
0 10cm
（1／4）
8号跡1・2、11号跡1～5、12号跡1・2、
16号跡1、その他の出土遺物1～8
0 10cm
（1／3）

第11図　出土遺物(4)

節文により区画された羽状縄文帯が巡る壺胴部3等が出土している。他には、内外面に条痕が施された縄文土器片8、9等も出土しているが混入であろう。遺構の平面形態、及び出土遺物の特徴から、帰属時期は弥生時代終末期と考えられる。

6号跡（第4図・図版2）

形態　北西―南東軸長3.78m、北東―南西軸長4.2mを測る、隅の丸まった不整な方形を呈する。南西側に5号跡が隣接する。

構造　柱穴は検出されず、遺構内北西寄りに炉が検出された。硬化面は検出されなかった。遺構深度が殆どなく、覆土は確認されなかった。

遺物・時期　遺物は検出されなかったが、遺構の平面形態等から、弥生時代終末期を中心とした帰属時期と判断したい。

7号跡（第4・6図・図版2）

形態　遺構の南西側半分以上が調査区外にあると考えられ、径4m程度の不整な円形を呈していたと考えられる。

構造　柱穴は検出されず、壁溝も検出されなかった。炉も調査区外に存在しているものと考えられる。深さは0.4m程度を測り、覆土はロームブロックを含む暗黒褐色土を主体とする。

遺物・時期（第10図・図版3・5・6）　遺物は、折り返し状口縁部に羽状縄文を施す浅鉢口縁部1や、結節文により区画された斜縄文帯が巡る壺頸部4が出土している。他に内外面に条痕を施した縄文深鉢胴部片11等が出土しているが、混入遺物と考えられる。遺構の平面形態、及び出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半を中心とした帰属時期と考えられる。

8号跡（第4・7図・図版2）

形態　遺構の大半が調査区外にあり、径5m程度の不整な円形を呈していたと考えられる。

構造　柱穴の一部及び出入り口に伴うピットが検出された。壁溝は検出されなかった。遺構内中央部に硬化面が広がっていたと考えられ、一部に焼土の堆積が見られた。炉は調査区外に存在しているものと考えられる。深さは0.2m程度を測り、ロームブロックを含む暗黒褐色土を主体とする。

遺物・時期（第11図・図版6）　折り返し状口縁部に斜縄文が巡る弥生土器壺口縁部1や、内外面が無文の縄文深鉢口縁部2が出土した。他に縄文土器片・土師器片・炭化物が少量伴う。帰属時期を判断する根拠に乏しいが、遺構の平面形態等から、弥生時代後期の竪穴建物跡と考えられる。

9号跡（第5・7図・図版2）

形態　南西側を撹乱により切られ、遺構の残存状況が極めて悪いため、平面形態は不明である。炉と考えられるピットが3か所検出されたため、3棟の竪穴建物跡を推定したものである。

構造　遺構深度がなかったため、覆土は存在していない。一部に掘り込みのしっかりした主柱穴となり得るピットが検出されたが、明確な対応関係は断定できなかった。炉と考えられる焼土が堆積したピットが3か所検出され、複数以上の竪穴建物跡が重複していた可能性が高い。

遺物・時期　出土遺物は混入と見られる焼礫の他は炭化物がある程度で、図示できる土器片はない。帰属時期の把握は困難であるが、古墳時代前期を中心とした帰属時期と判断したい。

2　炉穴跡・土坑

概要　調査によって検出された炉穴跡は５基、土坑は２基である。炉穴跡の一部からは、縄文時代早期後葉条痕文系土器片が出土しており、検出された炉穴跡は、当該期を中心とした時期に帰属する可能性が高いと考えられる。

10 号跡（第５・７図）

形態　径1.39m前後の不整な円形を呈する。

構造　深さ0.3ｍ程度を測り、土坑と考えられる。覆土は、ローム粒を含む暗黒褐色土を主体とする。

遺物・時期（第11図・図版６）　覆土中から、胴部に条痕状の沈線を施した鉢形土器胴部片１が出土している。出土遺物の特徴から、縄文時代中期後葉を中心とした帰属時期と考えられる。

11 号跡（第４図・図版２）

形態　遺構の北西部分が調査区外にあると考えられ、不整な楕円形を呈すると考えられる。

構造　深さ0.25ｍ程度を測り、遺構内南東側の地山ローム層が被熱し赤変していた。炉穴跡と考えられる。覆土は、暗褐色土を主体としていた。

遺物・時期（第11図・図版６）　覆土中から、口唇部に刻み目を持つ縄文深鉢口縁部片１や、内外面にナデ状の擦痕を有する縄文深鉢胴部片２等が出土している。出土遺物の特徴から、縄文時代早期後葉を中心とした帰属時期と考えられる。

12 号跡（第５・７図）

形態　径1.21m前後の不整な円形を呈する。

構造　深さ0.45ｍ程度を測り、覆土は、ローム粒を含む暗褐色土を主体とする。下層は焼土を含み、地山部分が激しく被熱し赤変していた。

遺物・時期（第11図・図版６）　炉穴跡と考えられ、覆土中から、外面にナデ状の擦痕が残る縄文土器片２が出土している。出土遺物の特徴から、縄文時代早期後葉を中心とした帰属時期と考えられる。

13 号跡（第５図）

形態　長径0.60～0.78m前後の不整な円形を呈した焼土面が４基集合する。

構造　上部は削平されて残存せず、焼土の堆積が、深さ0.1～0.2ｍにわたって認められた。

遺物・時期　図示できる遺物の出土はなかったが、遺構の形態から、縄文時代早期を中心とした炉穴跡と考えられる。

14 号跡（第５・７図）

形態　長径1.84m、短径0.7m前後の不整な楕円形を呈する。

構造　深さ0.2～0.25ｍ程度を測り、覆土は、ロームブロック及び焼土粒を含む暗黒褐色土を主体とする。一部、地山ローム層が激しく被熱し赤変していた。

遺物・時期　剥片１点が出土した程度で図示可能遺物はないが、遺構の形態から、縄文時代早期を中心とした炉穴跡と考えられる。

15号跡（第５図）

形態　長径1.2m、短径0.65m程度の不整な楕円形を呈する。

構造　深さ0.5ｍ程度を測り、遺構内中央から北西にかけて、焼土が堆積していた。

遺物・時期　図示できる遺物の出土はなかったが、遺構の形態から、縄文時代早期を中心とした炉穴跡の可能性がある。

16号跡（第５・７図）

形態　長径0.78m、短径0.6m前後の不整な円形を呈する。

構造　深さ0.1ｍ程度を測り、覆土は、ローム粒を含む暗黒褐色土を主体とする。

遺物・時期（第11図・図版６）　覆土中から、条線状の擦痕が入る縄文土器片１が出土している。縄文時代を中心とした土坑と考えられる。

３　その他の出土遺物（第11図・図版６）

遺構に帰属しない遺物のうち10点を挙げた。内外面条痕文が施された縄文早期後葉深鉢胴部片１、後期前葉と考えられる縄文土器片３、及び弥生時代後期後半を中心とした型式と考えられる壺胴部片８等がある。凹面に布目痕の残る平瓦片10は、近傍に推定される武士廃寺に由来する可能性が高いと考えられる。

第３章　まとめ

今回の調査は722.4㎡の限られた範囲であったが、竪穴建物跡11棟、炉穴跡５基、土坑２基の遺構群が検出された。竪穴建物跡では、縄文時代中期１棟、後期１棟、弥生時代後期（終末期を含む）６棟、古墳時代前期３棟が検出されている。また、５基の炉穴跡は縄文時代早期の所産と考えられ、うち２基は早期後葉と比定される。土坑は縄文時代中期後葉が１基、縄文時代（時期不明）が１基という内訳である。一部、古墳時代の遺構も検出されているが、縄文時代から弥生時代の遺構が中心と言える。

調査区南東部において出土した縄文時代後期堀之内式期の注口土器の存在は、今回の調査区に最も近い武士遺跡（調査団調査区）（半田1976）において、堀之内式とされる注口土器注口部片が出土した事実と合わせ、福増中ノ台遺跡一帯に堀之内式期の遺構群が濃密に分布していたことを示している。なお、この武士遺跡（団調査区）Ａ地区の調査では、今回の調査区とほぼ一致した様相が認められ、縄文時代早期炉穴跡２基、後期竪穴建物跡７棟、ピット６基等が検出されたほか、遺物も豊富で、縄文土器深鉢のほか土偶等の土製品、石皿や石棒といった石製品も出土している。

ほかに、東方約300ｍに位置する武士遺跡（県調査区）（田村他1996・加納他1998）の遺構及び遺

物を概観すると、縄文時代中期後葉から後期中葉にかけての竪穴建物跡423棟、土坑879基、掘立柱建物跡３棟といった多数の遺構と膨大な出土遺物が検出されているが、後期末葉から晩期中葉にかけては、遺物の量が非常に少なくなり遺構も検出されず、空白期が認められる。この空白期に東京湾岸付近に展開する祇園原貝塚や西広貝塚では遺物が豊富に出土しており、両貝塚と武士遺跡の関係等を対比することによって、遺跡の移動及び特徴等の関連を捉えられる可能性がある。

武士遺跡（県調査区）において再び生活の痕跡を見出せるようになるのは晩期末葉で、空白期を隔て突然にまとまった量の遺物が見られるようになり、氷Ⅰ式に並行する土器群と荒海２～４式の土器が出土する。福増中ノ台遺跡から出土した縄文土器片の中には変形工字文等が施された晩期終末を中心とした荒海式が含まれており、周辺に当該期の包含層が存在していたことを想像させる。武士遺跡（県調査区）ではほかに、晩期終末の包含層から、東海地方の影響を受けたと考えられる壺形土器の口頸部片が出土している。縄文時代から弥生時代への過渡期に、遠隔地から文物が流入していたことを示す遺物として注目される（渡辺2003）。

武士遺跡（県調査区）では弥生時代以降の遺構・遺物も多数検出されており、弥生時代中期では壺棺再葬墓４基と土坑２基が、後期では久ヶ原式期の竪穴建物跡63棟で構成される集落と３基の方形周溝墓が検出されている。また、武士遺跡（団調査区）においても、後期竪穴建物跡１棟、弥生時代（時期不明）竪穴建物跡５棟、方形周溝墓１基が検出されるなど、弥生時代の遺構分布も密であることがわかる。これらのうち後期の遺構群は、福増中ノ台遺跡で検出された弥生時代の遺構・遺物と時期的に重複する様相を示唆し、一体的に消長した可能性が考えられる。

福増中ノ台遺跡では他にも古墳時代前期のものと思われる竪穴建物跡が３棟検出されているが、大規模な削平を受けていたため遺物は検出されず、また以後の遺構も確認されない。周辺では、古墳時代中期・後期の空白期を経て、武士遺跡（県調査区）において７世紀後半～９世紀に造られた方形周溝状遺構が37基検出されている。埋葬施設を伴う例が多く、溝の一辺に地下式の玄室を設ける例や、方台部に凝灰質砂岩製の石櫃を埋納する例が主体である。その他に同時期の竪穴建物１棟と瓦の集中地点も確認されている。墓域は武士廃寺と同時代の葬地であったと考えられ（加納他1998）、今回の調査で遺構に伴わず検出された平瓦は、隣接する武士遺跡（団調査区）Ａ地区で検出された平瓦３点と同様に武士廃寺に由来すると推測するのが妥当であろう。

今後、周囲の調査事例がさらに蓄積され、当時の歴史環境が復原されていくことを期待したい。

（参考文献）

大村　直　1992『市原市叶台遺跡』市原市文化財センター調査報告書第44集　（財）市原市文化財センター
小川浩一　2008『市原市海士遺跡群（三入道地区）』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第６集　市原市教育委員会
忍澤成視　1999『市原市祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ　市原市文化財センター調査報告書第60集　（財）市原市文化財センター
加納　実 他　1998『市原市武士遺跡２』千葉県文化財センター調査報告第322集　（財）千葉県文化財センター
木對和紀　2010『市原市新殿古墳群』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第13集　市原市教育委員会
近藤　敏　2018『平成29年度　市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第43集　市原市教育委員会
田村　隆 他　1996『市原市武士遺跡１』千葉県文化財センター調査報告第289集　（財）千葉県文化財センター
鶴岡英一 他　2007『市原市西広貝塚Ⅲ』上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅦ　市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第２集　市原市教育委員会
半田堅三 他　1976『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団
安井健一 他　2005『市原市西広貝塚Ⅱ』上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅣ　市原市文化財センター調査報告書第93集　（財）市原市文化財センター
渡辺修一　2004「武士遺跡」『千葉県の歴史』資料編　考古２（弥生・古墳時代）　県史シリーズ10　千葉県

第１表　出土土器観察表

凡例：法量の＜　＞値は復元値、（　）値は現存値を示す。遺物注記は、現場段階の遺構番号である。

遺構番号	挿図番号	遺物番号	器種・遺存度	遺物注記	口径 cm	底径 cm	器高 cm	（外）色調 （内）色調	焼成	胎土	特徴	備考
1	8	1	縄文土器　深鉢 胴部片	004-1 一括				5YR6/6 橙 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	密	外　縄文施文後、磨消懸垂文施す 内　ナデ	
2	8	1	縄文土器　注口土器 完形	007-2	7.7	7.1	14.6	7.5YR5/6 明褐 7.5YR4/6 褐	良好	密	外　幾何文　磨消縄文（単節） 内　ナデ	
3	8	1	弥生土器　壺 頸部　4/5	012-2			（7.4）	7.5R4/6 赤 7.5YR7/6 橙	良好	密	外　沈線により区画された羽状縄文巡り、下端部、ヘラ状工具による刻み目施す。無文部、ヘラミガキ、赤彩 内　ヘラミガキ、赤彩	内面、器面の剥落著しい
3	8	2	弥生土器　鉢 口縁～体部下半　1/10	012-5	<11.8>			7.5YR7/6 橙 10YR7/4 にぶい黄橙	良好	密	外　ヘラナデ 内　ヘラナデ、やや強いヘラナデ	
3	8	3	弥生土器　壺 胴部下半～底部　1/6	012-6		<7.9>	（5.9）	7.5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良好	密	外　ヘラミガキ 内　ヘラナデ	
3	8	4	弥生土器　甕 底部　3/7	012-7		<7.8>		7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR7/6 橙	良好	密	外　ヘラナデ 内　ヘラナデ	
3	8	5	弥生土器　壺 頸部片	012-1 一括				10YR7/6 明黄褐 10YR7/6 明黄褐	良好	密	外　羽状縄文巡る 内　ヘラナデ	
3	8	6	縄文土器　深鉢 胴部片	012-11				10R4/6 赤 5YR3/2 暗赤褐	良好	粗	外　条痕文施す 内　ナデ	
3	8	7	縄文土器　深鉢 口縁部片	012-1 一括				7.5YR3/2 黒褐 7.5YR3/2 黒褐	良好	密	外　縄文施文後、区画文施す 内　ナデ	
3	8	8	縄文土器　深鉢 胴部片	012-1 一括				7.5YR4/2 灰褐 2.5YR6/6 橙	良好	密	外　RL の縄文施す 内　ナデ	
3	8	9	縄文土器　深鉢 胴部片	012-1 一括				5YR5/3 にぶい赤褐 7.5YR3/2 黒褐	良好	密	外　擦痕状の条痕施す 内　ナデ	
3	8	10	縄文土器　深鉢 胴部片	012-2				5YR4/2 灰褐 5YR6/6 橙	良好	密	外　条痕施す 内　ナデ	
3	8	11	縄文土器　深鉢 胴部片	012-1 一括				7.5YR3/1 黒褐 7.5YR4/2 灰褐	良好	密	外　沈線により区画された変形工字文施し、下部に斜行する沈線入る 内　ナデ	
3	8	12	縄文土器　深鉢 胴部片	012-9				5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙	良好	密	外　RL 縄文を地文として、沈線により区画された変形工字文や連続三角文施す 内　ナデ、一部擦痕状の条痕あり	
4	8	1	弥生土器　浅鉢 口縁～体部　1/4	027-40、45、56P-1	<20.1>		（5.3）	10R5/8 赤 10R4/8 赤	良好	密	外　口唇部、斜縄文巡り、口縁部、結節文により区切られた羽状縄文巡る。無文部、ヘラミガキ、赤彩 内　ヘラミガキ、赤彩	
4	8	2	弥生土器　壺 胴部～底部　4/7	027-1 一括、43、44、46、49、50、51、56P-1		8.0	（12.0）	10R4/8 赤 5YR6/6 橙	良好	密	外　結節文により区画された、斜縄文巡る。無文部、赤彩 内　ヘラナデ	
4	8	3	弥生土器　壺 口縁部　1/10	027-18				2.5YR5/6 明赤褐 7.5R4/6 赤	良好	密	外　折り返し状口縁部に羽状縄文巡り、下端部にヘラ状工具による刻み目施す。無文部、赤彩 内　ヘラミガキ、赤彩	
4	8	4	弥生土器　壺 口縁部片	027-1 一括				7.5YR7/6 橙 10R4/8 赤	良好	密	外　口縁部、折り返し状口縁 内　ヨコナデ、ヘラナデ。赤彩	
4	8	5	弥生土器　壺 胴部片	027-1 一括				5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良好	密	外　胴部、結節文帯巡る 内　ヘラナデ	
4	8	6	弥生土器　壺 胴部片	027-52				10R3/4 暗赤 2.5YR6/6 橙	良好	密	外　胴部、沈線で区画された連続山形文内に結節文巡る。無文部、ヘラミガキ、赤彩 内　ヘラナデ	
4	8	7	弥生土器　壺 口縁部片	027-1 一括				10R4/6 赤 10YR7/4 にぶい黄橙	良好	密	外　沈線により区画された連続山形文内に斜縄文施す。無文部、赤彩 内　ヘラナデ	
4	8	8	弥生土器　壺 胴部片	027-17				10R4/6 赤 10YR7/4 にぶい黄橙	良好	密	外　沈線により区画された山形文施す。無文部、赤彩 内　ヘラナデ	
4	8	9	弥生土器　壺 胴部片	027-1 一括				10R5/8 赤 5YR6/6 橙	良好	密	外　沈線により山形文状に区画された中に斜縄文施す。無文部、赤彩 内　ヘラナデ	
4	8	10	弥生土器　浅鉢 口縁部　1/10	027-1 一括				5YR6/6 橙 2.5YR6/8 橙	良好	密	外　口縁部、折り返し状口縁下端部に、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ	
4	8	11	弥生土器　鉢 口縁部片	027-1 一括				5YR6/6 橙 10R4/8 赤	良好	密	外　口唇部、斜縄文巡り、口縁部、羽状縄文施す 内　ヘラミガキ、赤彩	摩耗激しい
4	8	12	弥生土器　鉢 口縁部片	027-1 一括				5YR6/6 橙 10R5/8 赤	良好	密	外　口唇部、斜縄文巡り、口縁部、斜縄文施す 内　赤彩	摩耗著しい
4	8	13	弥生土器　甕 口縁部　1/10	027-14				7.5YR6/6 橙 2.5YR5/6 明赤褐	良好	密	外　口縁部、棒状工具を上から押し付け刻み目施す 内　ヘラナデ	
4	8	14	弥生土器　甕 口縁部　1/10	027-3				7.5YR4/1 褐灰 7.5YR6/4 にぶい橙	良好	密	外　口縁部、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ	
4	8	15	弥生土器　甕 頸部～胴部下半　1/8	027-1 一括、6、8、10				5YR4/2 灰褐 7.5YR6/6 橙	良好	密	外　胴部上半に一段の輪積み痕残し、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ	外面、煤の付着著しい

遺構番号	挿図番号	遺物番号	器種・遺存度	遺物注記	口径 cm	底径 cm	器高 cm	（外）色調 （内）色調	焼成	胎土	特徴	備考
4	9	16	弥生土器　甕 頸部～胴部上半　1/10	027-8				7.5YR4/2 灰褐 7.5YR6/6 橙	良好	密	外　胴部上半に一段の輪積み痕残し、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ。一部、やや強いヘラナデ	
4	9	17	弥生土器　甕 胴部　1/8	027-11、13、58P-2				7.5YR3/2 黒褐 7.5YR6/6 橙	良好	密	外　胴部上半に輪積み痕残し、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ	
4	9	18	弥生土器　甕 胴部片	027-59 東				5YR5/8 明赤褐 5YR6/6 橙	良好	密	外　胴部、輪積み痕残し、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ	
4	9	19	弥生土器　甕 胴部　破片	027-1 一括				7.5YR3/1 黒褐 7.5YR6/6 橙	良好	密	外　胴部、輪積み痕残し、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ	
4	9	20	弥生土器　甕 胴部片	027-1 一括				10YR6/3 にぶい黄橙 10YR7/6 明黄褐	良好	密	外　輪積み痕残し、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ	
4	9	21	縄文土器　浅鉢か 底部　1/10	027-25		<6.0>	（2.4）	7.5YR3/1 黒褐 7.5YR6/6 橙	やや不良	粗	外　ナデ 内　ナデ	白色粒（0.8 ～ 2.0mm 大・多量）混入
4	9	22	弥生土器　壺 底部　2/3	027-27、29		7.8	（2.8）	7.5YR7/6 橙 5YR6/6 橙	良好	密	外　ヘラナデ 内　ヘラナデ、ナデ	
4	9	23	弥生土器　甕 底部　1/6	027-1 一括、59 東		<9.0>	（3.3）	5YR6/6 橙 7.5YR4/2 灰褐	やや不良	密	外　ヘラナデ 内　ヘラナデ	
4	9	24	弥生土器　甕 底部片	027-1 一括		<6.0>	（2.1）	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/6 明黄褐	良好	密	外　ヘラナデ 内　ヘラナデ	
4	9	25	土師器　杯 口縁～体部下端　1/6	027-19	<11.0>		（4.9）	7.5YR7/4 にぶい橙 10YR7/4 にぶい黄橙	良好	密	外　ヘラナデ 内　ヘラナデ	
4	9	26	縄文土器　深鉢 口縁部片	027-2				2.5YR4/3 にぶい赤褐 2.5YR3/1 暗赤灰	良好	密	外　条痕文施す 内　ナデ状の擦痕入る。一部、条痕文	胎土に、繊維多量に含む
4	9	27	縄文土器　深鉢 胴部片	027-31				5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙	良好	密	外　磨消懸垂文施す 内　ナデ	
4	9	28	縄文土器　浅鉢か 口縁部　1/10	027-41				5YR3/1 黒褐 5YR3/1 黒褐	良好	密	外　口縁部、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ	
4	9	29	縄文土器　浅鉢か 胴部片	027-28				2.5YR4/4 にぶい赤褐 5YR6/6 橙	良好	密	外　沈線で区画された斜縄文巡り、隆帯部にヘラ状工具による刻み目施す 内　ナデ	
4	9	30	縄文土器　深鉢か 胴部片	027-16				2.5YR5/8 明赤褐 5YR6/6 橙	良好	密	外　胴部、隆線状の紐線文に点刻状の刻み施し、下部に LR の縄文施す 内　ナデ	
4	9	31	縄文土器　浅鉢か 胴部片	027-1 一括				2.5YR4/6 赤褐 2.5YR6/6 橙	良好	密	外　沈線による連続三角文？施す 内　ナデ	外面、赤色顔料付着か
5	10	1	弥生土器　壺 口縁～頸部　5/8	009-25、29、32 一括	13.0		（9.4）	10R5/8 赤 5YR6/6 橙	良好	密	外　ヘラミガキ 内　ヘラナデ、強いヘラナデ	外面、ヘラミガキ部分、赤く発色する
5	10	2	弥生土器 壺 胴部～底部　3/5	009-11、12、23、25、27、28、29、31、1 一括		9.0	（13.8）	10R4/8 赤 5YR2/1 黒褐	良好	密	外　胴部中位、ヘラナデ。胴部下位、ヘラミガキ。赤彩 内　ヘラナデ、やや強いヘラナデ	内面、赤彩施すか
5	10	3	弥生土器　壺 胴部　1/6	009-10			（11.4）	5YR3/3 暗赤褐 5YR6/6 橙	良好	密	外　結節文により区画された羽状縄文帯巡る。無文部、赤彩 内　ヘラナデ	内面、摩耗著しい
5	10	4	弥生土器　甕 胴部　1/6	009-2、11、12、13、14、16、17、1 一括			（15.0）	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙	良好	密	外　２段の輪積み痕、僅かに残る。ヘラナデ 内　ヘラナデ	
5	10	5	弥生土器　甕 胴部片	009-9、1 一括				10R5/6 赤 10R5/8 赤	良好	密	外　ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ	被熱し、赤色化している
5	10	6	弥生土器　甕 胴部片	009-32 一括				7.5YR7/6 橙 7.5YR6/6 橙	良好	密	外　ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラナデ	
5	10	7	弥生土器　器台 口縁～頸部　1/8	009-1 一括	<5.0>			5YR6/6 橙 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	密	外　口縁部、ヨコナデ。体部、ヘラナデ 内　ヘラナデ	
5	10	8	縄文土器　深鉢 口縁部片	009-32 一括				5YR3/2 暗赤褐 5YR5/3 にぶい赤褐	良好	密	外　条痕文施す 内　条痕文施す	
5	10	9	縄文土器　深鉢 胴部片	009-3				5YR4/4 にぶい赤褐 5YR4/6 赤褐	良好	密	外　条痕文、ナデ 内　条痕文、ナデ	胎土、繊維を多量に混入
5	10	10	縄文土器　深鉢 底部　ほぼ完存	009-28		9.0		5YR6/8 橙 2.5YR6/6 橙	良好	密	外　ナデ 内　ナデ	
7	10	1	弥生土器　浅鉢 口縁～体部下半部　1/10	010-4				7.5YR6/6 橙 10R4/8 赤	良好	密	外　折り返し状口縁部、羽状縄文巡り、下端部にヘラ状工具による刻み目施す。無文部、赤彩 内　赤彩	外面の摩耗、著しい
7	10	2	弥生土器　壺 口縁部　1/10	010-13				5YR6/6 橙 7.5YR7/6 橙	良好	密	外　折り返し状口縁下端部に縄文原体による刻み目施す 内　ヘラナデ	
7	10	3	弥生土器　壺 口縁部片	010-1 一括				5YR2/1 黒褐 7.5YR6/4 にぶい橙	良好	密	外　折り返し状口縁に羽状縄文巡り、下端部に縄文原体による刻み目施す 内　ヘラナデ	

遺構番号	挿図番号	遺物番号	器種・遺存度	遺物注記	口径 cm	底径 cm	器高 cm	（外）色調 （内）色調	焼成	胎土	特徴	備考
7	10	4	弥生土器　壺 頸部片	010-1 一括				10R4/8 赤 5YR6/6 橙	良好	密	外　結節文により区切られた斜縄文巡る。無文部、赤彩 内　ヘラナデ	
7	10	5	弥生土器　壺 頸部片	010-1 一括				7.5YR6/4 にぶい橙 5YR6/6 橙	良好	密	外　頸部、羽状縄文巡り、下端部、縄文原体による刻み目施す 内　ヘラナデ	
7	10	6	弥生土器　壺 胴部片	010-1 一括				5YR5/4 にぶい赤褐 5YR6/6 橙	良好	密	外　羽状縄文巡る 内　ヘラナデ	
7	10	7	弥生土器　小型壺 口縁部　1/10	010-1 一括				5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	良好	密	外　口縁部、沈線による連続山形文直下に結節文施す 内　ヘラナデ	
7	10	8	弥生土器　甕 胴部片	010-1 一括				7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	良好	密	外　輪積み痕残し、縄文原体による刻み目施す 内　ヘラナデ	
7	10	9	弥生土器　甕 底部　5/8	010-16、21、22、1 一括		<6.8 >	（4.3）	7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	良好	密	外　ヘラナデ 内　ヘラナデ	
7	10	10	弥生土器　甕 底部　1/4	010-2		<8.0>	（2.5）	2.5YR5/6 明赤褐 5YR4/2 灰褐	良好	密	外　ヘラナデ 内　ヘラナデ	
7	10	11	縄文土器　深鉢 胴部片	010-23				10YR7/4 にぶい黄橙 10YR6/2 灰黄褐	やや不良	粗	外　条痕文施す 内　条痕文施す	胎土に、繊維多量に含む
7	10	12	縄文土器　深鉢 胴部片	010-1 一括				5YR4/2 灰褐 10YR5/2 灰黄褐	良好	密	外　沈線による三角文や網状文？施す 内　ナデ	
8	11	1	弥生土器　壺 口縁部片	025-1 一括				7.5YR7/6 橙 7.5R4/6 赤	良好	やや粗	外　折り返し状口縁。口唇部、斜縄文巡り、口縁部、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヘラミガキ、赤彩	
8	11	2	縄文土器　深鉢 口縁部片	025-3				5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良好	密	外　ナデ 内　ナデ	
10	11	1	縄文土器　鉢 口縁～胴部　1/4	005-2	<30.0>		（13.8）	2.5YR5/6 明赤褐 5YR5/4 にぶい赤褐	良好	密	外　口縁部、ナデ。胴部、タテ方向の条痕状の沈線施す 内　ナデ、丁寧なミガキ	
11	11	1	縄文土器　深鉢 口縁部片	030-1 一括				5YR4/2 灰褐 5YR3/1 黒褐	良好	密	外　口唇部、刻み目施し、胴部、ナデ状の擦痕入る 内　胴部、ナデ状の擦痕入る	
11	11	2	縄文土器　深鉢 胴部片	030-1 一括				10YR7/4 にぶい黄橙 7.5YR5/3 にぶい褐	良好	密	外　ナデ状の擦痕入る 内　ナデ状の擦痕入る	
11	11	3	縄文土器　深鉢 胴部片	030-1 一括				7.5YR6/4 にぶい橙 2.5YR5/6 明赤褐	良好	密	外　沈線で区画された中に、附加条縄文３種？施す 内　ナデ	
12	11	1	縄文土器　深鉢 口縁部片	001-1、2、4 一括			（5.6）	2.5YR3/1 暗赤灰 2.5YR3/2 暗赤褐	良好	密	外　波状口縁を呈し、直下に楕円形の区画文施す 内　ナデ、ミガキ	
12	11	2	縄文土器　深鉢 胴部片	001-3				2.5YR5/6 明赤褐 7.5YR6/6 橙	やや不良	やや粗	外　ナデ、ナデ状の擦痕 内　ナデ	
16	11	1	縄文土器　深鉢 胴部片	006-2 フク土				5YR4/3 にぶい赤褐 5YR4/3 にぶい赤褐	やや不良	密	外　条線状の擦痕施す 内　ナデ	
一括	11	1	縄文土器　深鉢 胴部片	028-6				10YR6/3 にぶい黄橙 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	密	外　条痕文施す 内　条痕文施す	胎土に、繊維含む
一括	11	2	縄文土器　深鉢 胴部片	ゼンタイ一括				2.5YR5/6 明赤褐 5YR4/2 灰褐	良好	密	外　LR の比較的細かい縄文施す 内　ナデ	
一括	11	3	縄文土器　深鉢 胴部片	028-2				2.5YR4/4 にぶい赤褐 5YR6/6 橙	良好	密	外　縄文を地文にして、三角状の沈線施す 内　ナデ	
一括	11	4	弥生土器　浅鉢 口縁部片	028-1 一括				2.5YR7/8 橙 5YR7/8 橙	良好	密	外　口縁部、ナデ。２か所の焼成前穿孔施す 内　ナデ	
一括	11	5	弥生土器　浅鉢 口縁部　1/10	028-1 一括				7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	良好	密	外　口縁直下に鋸歯文施し、下部に斜縄文及び沈線入る 内　ヘラナデ	
一括	11	6	弥生土器　壺 口縁部片	028-1 一括				10YR6/4 にぶい黄橙 7.5YR6/6 橙	良好	密	外　口縁部、折り返し状口縁に斜縄文巡り、下端部にヘラ工具による刻み目施す。棒状浮文貼り付け、ヘラ状工具による刻み目施す 内　ヨコナデ	
一括	11	7	弥生土器　壺 口縁部片	028-1 一括				7.5YR7/6 橙 5YR6/6 橙	良好	密	外　口縁部、折り返し状口縁。口唇部、斜縄文施す 内　ヘラナデ	
一括	11	8	弥生土器　壺 胴部片	028-1 一括				10R5/6 赤 5YR6/6 橙	良好	密	外　結節文帯巡る。無文部、赤彩 内　ヘラナデ	
一括	11	9	弥生土器　甕 底部　1/6	028-1 一括		<5.6>	（1.8）	2.5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	良好	密	外　ヘラナデ 内　ヘラナデ	

第 2 表　出土石器観察表

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種別	遺物注記	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	色調	備考
4	9	32	磨石	027-15	10.8	5.9	4.8	439.5	2.5Y6/2 灰黄	裏面の摩耗痕著しい
4	9	33	磨石	027-26	5.9	8.3	3.0	230.5	7.5YR6/3 にぶい褐	残存面、両側面のみ
4	9	34	磨石	027-33	4.8	5.9	2.6	86.7	5YR3/3 暗赤褐	一部、赤色味を帯び、焼礫として利用された可能性あり
4	9	35	磨石	027-37	5.7	3.2	3.9	94.5	10YR5/2 灰黄褐	
4	9	36	磨石	027-34、36	3.5	4.6	2.9	65.0	2.5YR4/3 にぶい赤褐	一部、赤色味を帯び、焼礫として利用された可能性あり
4	9	37	砥石	027-57P-1	6.5	4.3	3.1	16.5	2.5Y8/3 淡黄	軽石。正面部、凹状に摩耗著しい
5	10	11	フレーク	009-32 一括	2.9	1.8	0.5	2.4	2.5Y6/2 灰黄	
5	10	12	磨製石斧	009-4	4.9	4.5	0.9	26.3	10YR5/2 灰黄褐	左側面のみ残存
5	10	13	磨石	009-32 一括	5.3	3.8	3.5	64.4	10YR7/3 にぶい黄橙	
7	10	13	垂飾状石製品	010-1 一括	5.2	3.3	4.0	12.2	10YR6/2 灰黄褐	右側面、摩耗著しい。表・裏面、一部赤褐色に変色しており、赤彩施したか
7	10	14	砥石	010-12	8.0	7.1	4.9	37.0	10YR8/3 浅黄橙	軽石。裏面部、摩耗している
11	11	4	磨石	030-1 一括	7.9	5.1	2.7	141.1	2.5Y6/2 灰黄	
11	11	5	磨石	030-1 一括	7.4	2.8	4.1	83.5	10YR6/2 灰黄褐	

第 3 表　出土土製品観察表

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種別	遺物注記	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	色調	焼成	胎土	特徴	備考
一括	11	10	平瓦	ゼンタイ一括	全長 （11.6）	狭端幅 （5.4）	端部厚 （13.0）	188.1	凹面　10YR6/1 褐灰 凸面　10YR5/1 褐灰	良好	密	凹面　布目痕。端部、ヘラケズリ 凸面　ナデ	平瓦と考えられるが、凸面にナデ調整が行われている

遺跡全景（南から）

調査風景（南東から）

1号跡（北東から）

2号跡注口土器出土状況（西から）

3号跡遺物出土状況（西から）

3号跡（南西から）

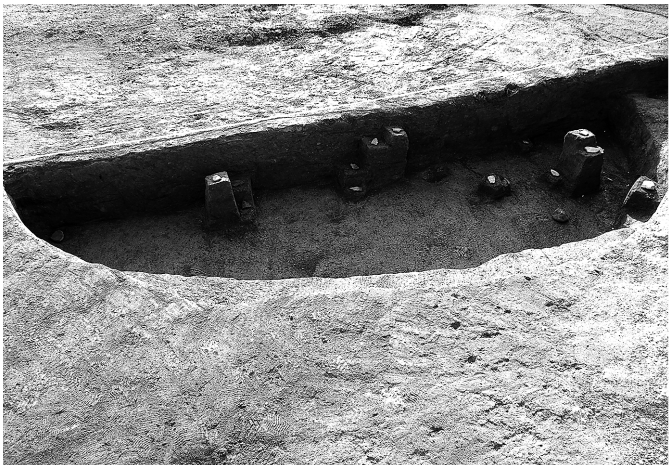
4号跡遺物出土状況（南東から）

4号跡（南東から）

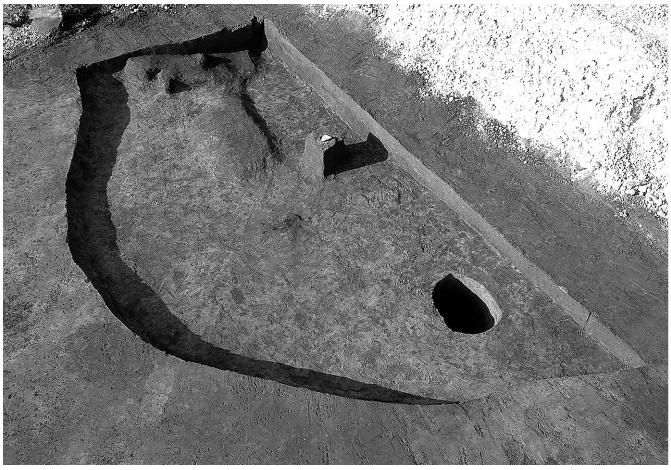
5号跡遺物出土状況（南東から）

5号跡（南東から）

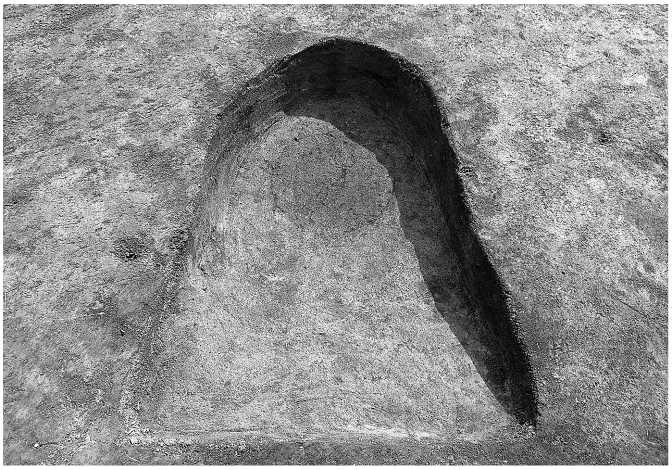
6号跡（南東から）


7号跡遺物出土状況（東から）

7号跡（北東から）


8号跡遺物出土状況（南から）

9号跡（南東から）


11号跡（北西から）

2 号跡−1

2 号跡−1

2 号跡−1

2 号跡−1

2 号跡−1

2 号跡−1

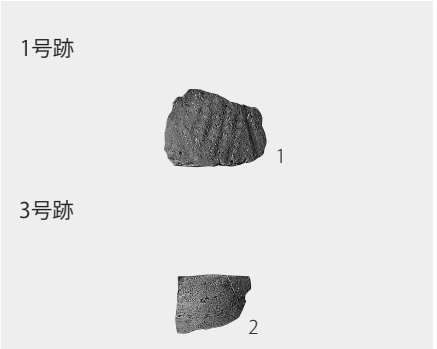
3 号跡−1

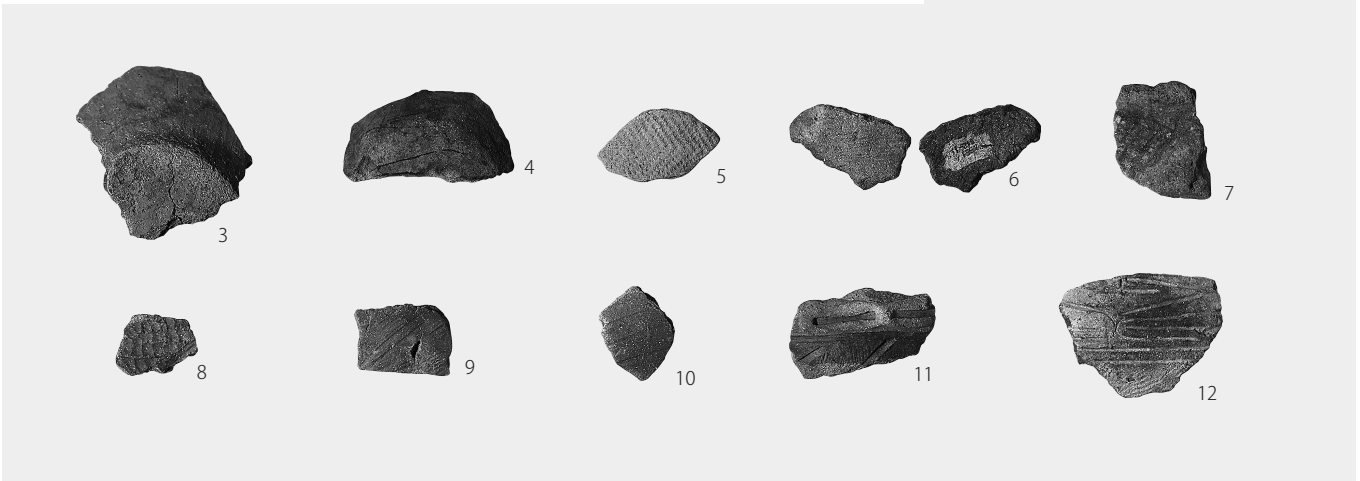
5 号跡−1

7 号跡−9

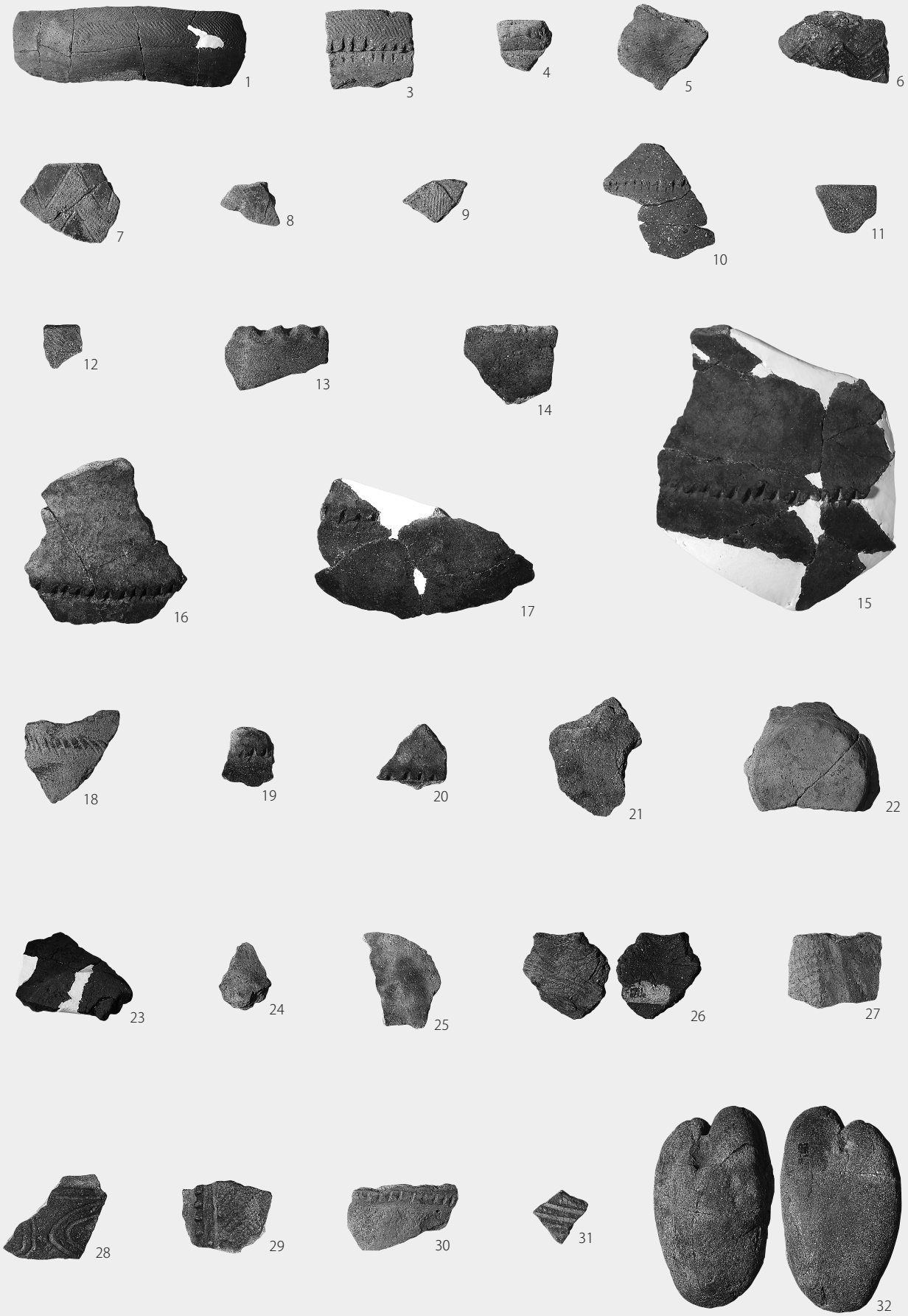
4 号跡−2

5 号跡−2





4号跡


1
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

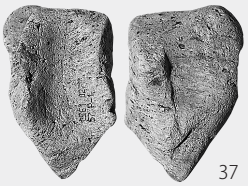
4号跡

33

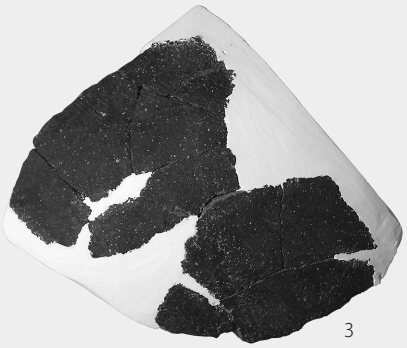
34

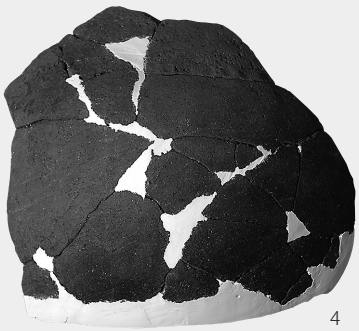
35

36


37

5号跡


3


4

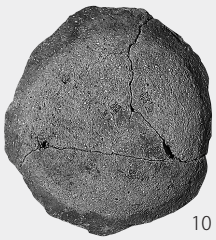
5

6

7

8

9


10

11

12

13

7号跡

1

2

3

4

5

6

7

8

9

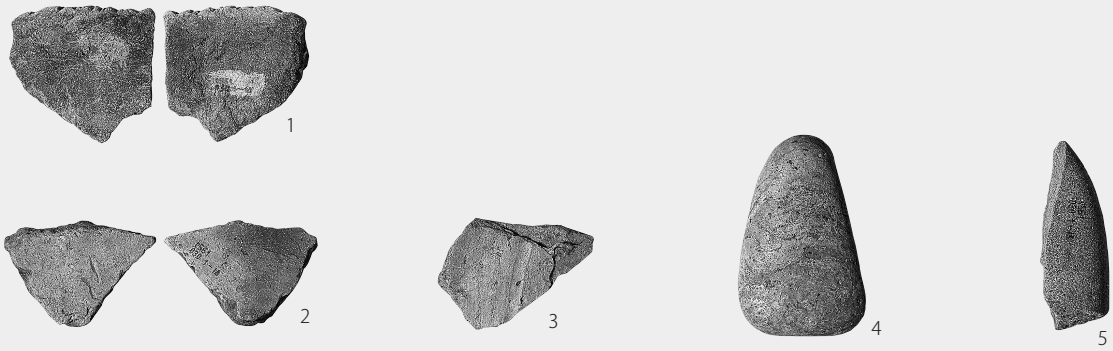
10

7号跡

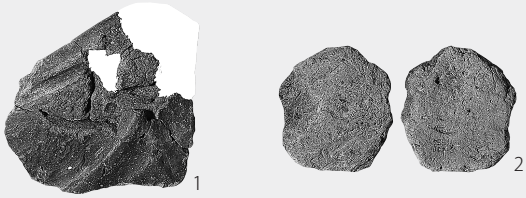
8号跡

10号跡

11号跡

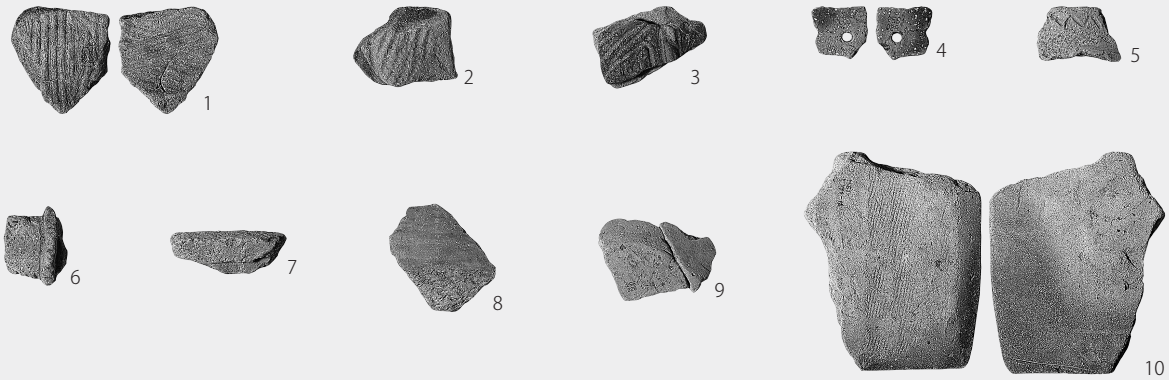


12号跡



16号跡

その他の出土遺物



報　告　書　抄　録

ふりがな	いちはらしふくますなかのだいいせき
書　名	市原市福増中ノ台遺跡
副書名	
巻　次	
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第 44 集
編著者名	小川浩一・中野喬介
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒 290-0011　千葉県市原市能満 1489 番地　TEL 0436（41）9000
発行年月日	2018 年（平成 30 年）9 月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ふくますなかのだいいせき 福増中ノ台遺跡	いちはらしふくます 市原市福増 123-2、 123-3、123-4 地先（ちさき）	12219	587	35° 28′ 32″	140° 08′ 30″	20180201 ～ 20180301	722.4	展開検査場の造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福増中ノ台遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳	竪穴建物跡 11 棟 炉穴跡 5 基 土坑 2 基	縄文土器 弥生土器 平瓦	調査区南東部において、縄文時代後期注口土器が出土した。

要　約	福増中ノ台遺跡は、養老川中流右岸の沖積面を西に望む標高 70m 程度の台地上に位置する。 調査の結果、縄文時代早期と考えられる炉穴や縄文時代後期～古墳時代前期までの竪穴建物跡等を検出した。調査区南東部において、縄文時代後期の注口土器が出土している。 また、縄文時代晩期末葉を中心とした土器が出土しており、東に近接する武士遺跡を含めた晩期遺構の存在が想定される。

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第 44 集

市原市福増中ノ台遺跡

平成 30 年 9 月 20 日　印刷
平成 30 年 9 月 25 日　発行

編　　集　　市原市埋蔵文化財調査センター
千葉県市原市能満 1489
TEL 0436（41）9000

発　　行　　株式会社　城　装
市原市教育委員会
千葉県市原市国分寺台中央 1－1－1
TEL 0436（22）1111

印　　刷　　三陽メディア株式会社
千葉県市原市五井東 3－47－10
TEL 0436（22）4348